

中田元子著

『乳母の文化史』

—19世紀イギリス社会に
関する一考察』



評者：竹内 敬子

本書は、19世紀イギリスの「乳母」を対象とした歴史研究である。乳母とは、雇用され、金銭の対価を得て、他の女性の子どもに授乳し育てる女性である。乳母は、安全な人工哺育が発達した現代ではほぼ忘れられた存在であるが、当該期のイギリスにおいては決して珍しいものではなかった。著者はこの乳母の実態や表象の分析を通し、授乳は母子の間の「自然」な行為ではなく、そこに「文化性」があること、そして歴史性があることを鮮やかに描き出している。

まず、本書の内容を紹介しよう。「第一章 乳母雇用の背景」では、女性に向けた家庭運営の「手引書」や医師による「育児書」を手がかりに、19世紀イギリスの乳母雇用の背景が概観される。19世紀半ばには、ミドルクラスの価値観によって授乳は「母親が当然行うべき」ものと考えられるようになっていた。しかし、すべての母親がスムーズに母乳哺育を出来る訳ではない。とはいえ、19世紀半ば過ぎにはかなり盛んになっていた研究・開発にもかかわらず、人工哺育はいまだ安全なものではなかった。乳母雇用は、最も安全な代替手段であった

のだ。もちろん、この代替手段は乳母を雇用するだけの金銭的余裕のあるミドルクラス以上の者にしか許されていなかった。

「第二章 乳母雇用の実態と問題」で著者は、利用可能な数少ない手がかりとして、『タイムズ』紙の求職・求人広告を利用しながら、乳母雇用の増減の傾向を探っている。それによると、乳母雇用の需要は19世紀半ば過ぎまではかなり多かったが、その後、人工哺育との緊張関係の中で急速に減少していく、ということが確認される。

この章では、さらに、乳母雇用にまつわる当該期の人々の懸念が、育児書や医学雑誌の記事をもとに紹介される。授乳による乳母の気質や病気の伝染、乳量不足をごまかすためのアヘン剤の使用、女主人との関係、他の使用人との関係、乳母が既婚の場合は、その夫との関係、乳母が未婚の場合は、その道徳性など、心配の種は尽きない。注目すべきは、深刻でありながら見過ごされがちだった「乳母の子」の生存の問題である。著者はこの問題に鋭く迫る。乳母が雇用主の家に住み込む場合、乳母は自身の子を家族や他人に任せざるを得ないし、その際、いまだ安全ではない人工哺育に頼らざるを得ない。しかし、この「乳母の子」問題は当時、正面から取り組まれることはなかった。乳母を雇用する母親の子どもの命が、乳母の子どもの命より優先されたのである。

「第三章 ドンビー氏の乳母対策」は、チャールズ・ディケンズの『ドンビー父子』を、当時の乳母についての言説と対比しつつ分析している。この小説の主人公であるドンビー氏は妻を出産で亡くし、残された息子のために乳母を雇用せざるを得なくなる。乳母選定する手順、乳母の待遇が相対的に良い（乳量・感情の安定の確保のため）ことから生じる他の使用人の嫉妬など、実際に乳母を雇用した家庭で起こったで

あろうさまざまなことが描かれている。興味深いのは、この作品には、乳母雇用により「下層階級とつながりが生じること」への恐れが読み取れることである。ドンビー氏は、乳母雇用を通じて生じる下層階級との「結びつき」を嫌悪し、恐れる。しかし、我が子の生存のために乳母を頼らざるを得ない心の軋轢は、乳母という存在が内包する矛盾を象徴していると言えよう。

「第四章 乳母の声」では、まず、「唯一の乳母の手になる」史料としての「新聞の求職広告」から乳母自身の声に迫るという挑戦的な試みがなされる。乳母候補者たちは、求職の際に、健康状態、年齢、子どもの月齢などの情報と共に、自らを「品行方正」であると語ることが多かった。著者は、彼女たちが職を得るために雇用者の希望を推測し、それに合わせたかもしれない、としながらも、ここには彼女たちが現実を「生き抜く」ための「振る舞い」と「知恵」が表出されている、とする。

この章では、さらに、イギリス文学において「初めて乳母を主人公にした小説」として、ジョージ・ムアの『エスター・ウォーターズ』が扱われる。エスターは、奉公先で「結婚する」と騙され同僚の使用人の子を妊娠・出産し、自分の子は当時「ベビー・ファーム」と称されて社会問題になった劣悪な施設の一つとも言える場所に預け、住み込みの乳母となる。エスターは、当時の規範からは正しい「母の範疇」からは外れるものの、我が子を愛しく思う気持ちを持つ女性で、それゆえに、葛藤し、苦しむことになる。乳母雇用はミドルクラスの価値観と現実に齟齬が生じた時に折り合いをつけるための手段であり、その矛盾の中で最も苦しむのが乳母当事者であることが描かれている作品と言えよう。

「第五章 母親たちの試練」で、著者は、5

名の乳母雇用階級の女性たちの妊娠・出産・育児がどのようなものであったかを、本人の日記・手紙、周辺の人物の日記、伝記などから抽出している。取り上げられたのは、首相経験者グラッドストーンの妻、キャサリン・グラッドストーン、『ドンビー父子』の作家ディケンズの妻、キャサリン・ディケンズ、『家政読本』を書いたイサベラ・ビートン、バートランド・ラッセルの母であり、自身も急進主義者で女性参政権運動の活動家であった、アンバリー子爵夫人キャサリン・ラッセル、インド駐在イギリス人の妻であり『インド家政大全』の共著者であるフローラ・アニー・スティールである。どの女性の体験もそれぞれに興味深い。加えてヴィクトリア女王の妊娠・出産・育児についての発言も紹介されている。さらに、女性協同組合が編纂した組合員の手記を史料に労働者階級の母親の母親観、授乳観も紹介され、本書に厚みを加えている。

「終章 乳母の復活」では、安全な人工乳の入手が容易になった現在、乳母が「復活」していることが紹介されている。19世紀イギリスにおけるように金銭の授受を伴うこともあれば、かつての日本の「もらい乳」のように相互扶助の色合いが強い場合もある。

さらに「付章 明治初期日本の母乳保育と乳母についての言説——欧米事情流入の影響」では日本の体験についても触れられている。開国・明治維新を経て日本が欧米諸国の文化と接する中で、育児の責任を母に置き、生母による授乳を重視する傾向が強まって行ったことが江戸時代の育児書、明治初期の育児書を手がかりに検証されている。

内容紹介がいささか長くなってしまったが、以下、何点かにわたり、本書について論評したい。第一に、「乳母」という研究対象を選んだ

著者の慧眼を評価したい。本書が明らかにしたように、生母の授乳を「自然」とし、望ましいとする「文化」は、さまざまな言説のせめぎ合いの中で確立した。著者は、その分析を生母が授乳を「する」という場面よりむしろ、それを「しない」「出来ない」という場面で行ったが、そのことにより、著者は授乳の「文化性」をより鮮明に抽出することに成功していると思う。第五章で紹介されたディズレーリの日記では、順調であったと思われる第一子への妻の授乳についての記述はなく、しかし、第二子で妻が授乳の困難に遭遇すると、にわかには夫妻の葛藤が詳述されることになる。著者が詳しく紹介する医学書や育児書でも、生母による授乳の推奨は、それを「しない」ことへの非難、「しない」ことが招く良からぬ結果についての警告と併せて行われている。当該期の女性は授乳の喜びや幸福より、規範から外れることの恐れによって授乳の文化を内面化していったのではないか。

第二に、本書が、「家庭内の性」を忌避する当該期のミドルクラスの価値観と乳母雇用の間で生じる矛盾や齟齬に目を向け、その帳尻合わせや糊塗に「階級」という文脈から鋭く迫っている点も注目すべきであると考え。乳汁の分泌は「受胎・妊娠・出産を経た女性の身体」に起こる。授乳を美德として賞賛することでミドルクラスの母は「非性的存在」とされる。ところが、そこに同じく母の身体を持つ乳母が、正に、その母の身体を「売り物にして」家庭に入り込んでくるのだ。医学書や育児書は、乳母の選択や監督における母親の役割を強調することなどを通じて、この矛盾になんとか辻褄を合わせようとするのである。そして、この階級の問題が最も先鋭に表れる「乳母の子」の問題に着目し、詳細に分析した点も本書の優れた点である。しばしば指摘されるように、ある時代のある変化が、全ての女性に一樣な体験となる訳で

はなく、その女性が属する階級や階層によって異なった、そしてしばしば不平等を含む体験となるのが、ここでも如実に表れている。19世紀のイギリスは、女性には厳しく一夫一婦制を求める一方で、男性の家庭外の性に寛容であるという「性のダブルスタンダード」の時代であったが、実は異なった階層の女性の間でも重層化された性のスタンダードが存在したこと、乳母雇用階級の「母」の美德は、乳母の階層の女性の犠牲の上に成立していたことを、本書は暴いている。

女性労働史を専門とする私にとって最も興味深かった点は、これまで「家事使用人」の中に埋もれて不可視化されていた乳母という「女性労働者」に著者が光をあて、その実態に迫った点である。乳母は、妊娠・出産後の授乳可能な期間に限り就くことの出来る職業なため、統計上にも計上されにくい。彼女たちは、言わば、極度にカジュアルでテンポラリーな労働者と言えよう。著者は限られた史料からその雇用の趨勢を確認するという困難な作業に取り組んでいる。また、良好な乳汁を十分に分泌することが必要、という仕事内容の特殊性から、乳母は他の家事使用人に比べ相対的に良好な条件で雇用されていたことが明らかにされており、当該期の女性雇用のより正確な構図を知る上で示唆に富む。

上記で「女性労働者」という言葉を使ったが、乳母はそもそも「労働者」なのだろうか。著者は序章で乳母の労働は「乳房によるもの」なので「労働」の領域にうまく収まらない、と指摘している。女性の身体や性と労働との関係は、「労働とは何か」という本質的な問題を私たちに突きつける。授乳という乳母の「労働」は今日の代理母とも同じ範疇に入れられるべきなのか、授乳や代理母はさまざまなセックスワークと地続きなのか、あるいは別物なのか。

このいまだ未解決で重要な問題を考える必要性を本書は示唆していると思う。

第五章で女性協同組合による会員への調査を利用し、労働者階級の女性の声が紹介されている点も私には大変興味深かった。著者が指摘するように、生母が授乳することが望ましい、とする考え方はミドルクラスの価値観を反映したものである。本書で利用される史料のほとんどはミドルクラスの著者の手になるもの、あるいはミドルクラスの読者を対象としたものとなっている。しかし、著者は、この授乳についての考え方が、労働者階級の女性にどの程度共有されているのか、ということにも目配りをしている。19世紀末から20世紀初頭に向け、労働者階級の体格や体力が貧弱であることが「国力」の問題として認識され、労働者階級の母親たちの育児に厳しい目が向けられ、彼女たちへの「啓蒙」も行われた。著者は、女性協同組合の会員たちが、我が子にとって母乳が最善だという認識を持ちながらも、日々の労働や家事での疲弊により授乳が容易ではないこと、彼女たちには「金」で代替手段を入手できない、という厳しい現実を抽出している。

上記のように私は本書から多くの示唆を受けたが、気になった点も何点かある。その一つは、文学研究と歴史研究の関係についての明示的な説明があると、歴史研究寄りの読者に対してより親切であっただろう、ということだ。もちろん、文学作品がその書かれた時代を知る有効な手がかりとなることは言を俟たないし、実際、著者は二つの文学作品を当該期の文脈の中で分析し、そこから当時の乳母雇用をめぐるさまざまな「実態」の一端を私たちに知らしめて

いる。ただ、特に「乳母の声」を知る貴重な手がかりとされている『エスター・ウォーターズ』のエスターの「声」の部分を実際の乳母の一般的な「声」と考えて良いのか否か、その代表性についてはどう考えたら良いのか、というような点についての補足的な説明が欲しかったと思う。第五章では未婚の母が子どもを「邪魔者」と考え、その「始末」のために極めて劣悪な託児所であるベビー・ファームに預けることが「一般的了解」であった、という記述もあり、エスターの葛藤がどの程度乳母の現実を反映しているのか、ということが気になった。

もう一つは、史料の制約が厳しい中、無理な注文ではあると思うが、乳母が女性労働者、或いは労働者階級に占める位置がどのようなものであったのか、著者が分析した文献の中で知り得る限りで乳母になる前の職業や置かれた状況の傾向は見出せるのか否か、第五章で紹介された女性協同組合ギルドの会員たちと乳母たちの位置関係はどのようなものか、などの点についても、もう少し言及があると良かったのではないかと、思う。しかし、この点については、著者から私たち女性労働史研究者に与えられた宿題と考えたい。

本書は、乳母を対象に授乳の文化性を明らかにした読み応えのある良書であるが、女性労働史の観点からも、重要でありながら看過されてきた、そして今後解かれるべき問題についての示唆を多く含んでいる。

(中田元子著『乳母の文化史——19世紀イギリス社会に関する一考察』人文書院、2019年1月、286頁、定価3,080円(税込))

(たけうち・けいこ 成蹊大学文学部特任教授)